

## 記者の視点

毎回、業界紙誌の皆様からのいろいろな視点で楽しい記事を御寄稿いただいています。  
今回は油脂特報社 蟻川社長から御寄稿いただきました。

### 「宿命」とは

有限会社油脂特報社  
代表取締役社長 蟻川 宏

東日本大震災から13年。当時の強烈なトラウマから、あれ以来、揺れに敏感。今年は正月に能登半島地震が発生、直近では関東が揺れまくっている。3月21日、午前9時8分。事務所向かう途中、中央線四ツ谷駅停車時に車両が揺れ、乗客のスマホが一斉に緊急地震速報を鳴らした。

岩手県宮古市で中高6年間を過ごし、妻は高校3年時の同級生。実家は三陸大津波など何度も被害を受け、長大な防潮堤を築いたことで有名な田老町（現在は宮古市と合併）で、町全体を囲む総延長2433メートル、高さ10メートルの壁はかつて「万里の長城」とも呼ばれた。

2011年3月11日14時46分。当時47歳だったが、経験のない激しい揺れに東京・神田の事務所は本棚が倒れ、その扉のガラスが砕け散った。巨大な津波が三陸沖を襲ったと伝えるテレビ。その映像を見たとき、最初は液状化が起きたのだと思い、それほど深刻には考えていなかった。しかし、その後の惨状は今に伝えられている通り。妻の実家、そしてすぐそばにあった義理の姉の家も津波にさらわれた。脳梗塞を患い、寝たきりで家にいた義理の母は今も行方不明のままである。

昨秋、がんを患い、一時は死を意識。運よく復活できたのだが、その経過を振り返ると、すべてがラッキーだったとしか言いようがない。そこに「宿命」を感じざるを得ない。

3・11の1週間ほど前、妻が実家の母の様子を見に行きたいといい、娘と一緒に田老に帰ることになった。当時、娘は高校三年生の受験生。大学に合格していたら、妻も娘も津波にさらわれていたかもしれない。

2024年3月、妻は元気で孫の面倒をみている。娘は二児の母親だ。13年前の2月末、なぜ妻と娘は田老に帰らなかったのか。娘は受験した大学に合格できず、浪人するのか、それとも別の道を探るのか、要するに進路が決まっていなかった。妻は実家に帰るのは娘の進路が決まってからにするとした。妻は二度と実家に帰ることはなく、母親に会うこともなかった。

3月11日を迎えるたびに、もし娘があの時、大学に合格していたらどうなっていたのか、と考える。いまでこそ「娘がアホで良かった」と笑い話しにできるが、最悪の事態を想像すると、それは恐ろしい。同時にこれも「宿命」であったのか、と思わざるを得ない。

そして、もう一つ、そこに大きな「宿命」があった。妻は4人兄弟で姉が二人、兄が一人。兄は地元で消防士、実家にいた。当時、長姉が闘病中で花巻の病院に入院していた。3・11、兄はその姉の見舞いに行き、津波に巻き込まれることを免れた。もし、見舞いに行っていなかったなら……。

「宿命」とは、自分の意志に関わらずやってきて、避けて通れないもののうち、生まれる前に決まるものを指す。そして、生まれる前に決まってしまうため、まったく変えることはできないし、避けて通ることはできない。宿命の「宿」は「前世からの」という意味を表わす。

生きていることに感謝し、自分のでき得ることを全うしたい。